

「天職と生き甲斐」

平成23年4月13日  
株式会社エモーション  
「社内学校」

仕事には、三つの方向性がある。

- 一、 任務（お金を稼いで生活をする。給料の為に仕事をする。）
- 一、 経歴（昇進によって達成感を得る。）
- 一、 天職（自ら情熱を傾けて献身する仕事のこと。）

一般的には、「任務」と「天職」を混同されることは無いが、「経歴」と「天職」は混同されやすい。

一人一人の天職とは、より良いもの、何かスケールの大きいものに貢献することである。（宗教的なものも含む）

経歴は、昇進が終わりを迎えると、つまり頂点を極めると、その後「疎外感」（むなしさ）を覚えてしまうもの。

「地球を救う」とか「環境問題に貢献する」とか「人の喜ぶ顔が見たい」とかこれらスケールの大きいものには、終わりが無い。故に、やり続けるしかない。

永遠に続くものには、圧倒される感がある。

歯磨きは、終わりがあろうと無い。これと同じようにその時、その時の今を、貫けば良いだけのこと。

大きなもの（こと）に貢献するというのも、これと同じ。

その日、その場所、その瞬間に、大きな物事に貢献する気持ちを持って、行動すれば良い。

天職とは、スケールの大きな何かに貢献する、そのような仕事のこと。

スケールの大きなものを見つけることが、天職を見つけることになり、どんな任務も天職に成る可能性がある。

また、どんな天職も任務になる可能性もある。

例えば、利益獲得のみに熱心な医者の仕事は、天職ではない。医者自身の心の持ちよう、天職にも成り、任務になってしまうことがある。

自分の子供を世の中に役立つ人と成って欲しいと願いながら子育てをする母親の行為は天職である。

「雑務」とは、雑にこなすから、雑務と言う。  
そこに、心を注ぐか否かで雑務になってしまうか、否かである。

一般に、各々がしているお金を稼ぐ任務が、そのままに放って置くと任務のまま、天職にならない。

その任務の中に「スケールの大きい何か」を見つけることが出来れば、それは天職に成る。その「スケールが大きいか小さいか」を決めるのも自分自身である。

肝心なことは、自分に適した仕事を探すことではなく、今の仕事への自分の姿勢を見直し、その仕事が自分に適していることに気付くこと。

その気付きがあった時に人は生き甲斐を感じる。

不満を抱いていた頃とは違うということを一步下がって考えてみる。

そうすると、工夫するしかない自分を再認識する。

ある意味、仕事をゲーム感覚で楽しんで、自分が主体的に責任感を抱きながら、仕事に取り組んで行く。

そうすると、「これは、天職かも？」と考える道に近づいて行ける。少なくとも、不満を言うのを止めるだけで、かなりの主体性が発揮出来、それに伴って、責任感も湧いて来る。

仕事の中に生き甲斐を感じる方法は、自分の今やっている仕事は将来、どうなっていくのかを見れば良い。

具体的には、誰の為になっているのかを見出せば良いのである。

昔、松下幸之助さんが工場の作業員の作業風景を見学して、作業員達にこう言った「ええ、仕事しとるなあ。」と。

そして説いたのである。

「子供達は夜になると、灯りが無いので、本も読めなくなる。あんたらが、一球一球、電球を磨いてくれているから子供達が読書出来る。子供達は、読書によって将来の夢や希望を抱くことが多くある。その子供達の未来を明るくする仕事をしてるんや。ええ、仕事をしよるなあ。」と。

つまり、無駄なことは、何も無い！ということ。

その仕事をただの作業と考えてしまっているのは、他ならぬ自分自身なのである。

先ず、自分を疑え、もしかしたら、自分が生き甲斐を見出していないだけ、感じていないだけじゃないかと。

誰かの為になるはずなのに、気付いていないのではないかと、自分を疑ってみよ。

働くとは、端（はた）を楽（らく）にすること。

人は、誰かの為になると感じれば、嬉しくなるように出来ている。

もし、どうしても今の仕事に意義を見出せないということなら、一歩、二歩、三歩進んで、自分が社長なら、どう考えるだろう。という思考回路を持つこと。

現在の自分の仕事の段階で支障を来すことがあれば、どれだけ他の仲間や、会社全体に迷惑が掛かるのか、ということに思いを馳せてもらいたい。

企業とは、それを構成している一人一人が責任者の集まりなのであって、現在の自分のポジションを自覚して行動することが「しあわせ」につながり、生き甲斐を見出す近道なのである。